英文のホールデン

大　川　　淳
（2004 年度 B, 2006 年度 M, 2009 年度 D）

奈良の田舎学生だったわたしは，ただ単に英語でなにかをしたいという凡庸な目標で親を説得し，関西学院は英文科に入学した。本音では，奈良盆地特有の山で閉ざされた世界が息苦しいとおもっていたのだろうか，「神戸」（にあると田舎学生は思っていた）のミッションスクールに入れば，奈良盆地から，広い世界へと脱走できると本気で思っていたのかもしれない。しかし，そんな曖昧で浅はかな目標が当然仇となり，大学の講義はろくに出ず，出席しても，夜のアルバイトに備えて教室の最後尾で爆睡するという，典型的な不真面目な学生生活が待ち受けていた。そうこうするうちに，悶々とした大学生活の 1 年目が終わり，劣等生が見事に出来上がってしまった。

授業が終わり，居酒屋のバイトをしに心斎橋へと向かう前に，時間を潰さなければいけなかった。人混みが苦手なわたしは，梅田駅の雑踏を避け，紀伊国屋書店によく避難した。そこで，いつも決まって青い本が目に入った。それは J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』だった。白水社から出ている，野崎孝訳の『ライ麦』だ。帯には，「若者たちの心をとらえ続ける」云々と書かれていた。名ばかりの文学部生であったわたしだったが，この背表紙のキャッチコピーに惹きつけられ，無意識にその青い本を手にとっていた。それから，わたしの手と紀伊国屋書店の棚との間で行き来する儀式的な運動が，百回ほど繰り返されたのち，『ライ麦』は，いつのまにか，新調されたわたしのカラーボックスに陣取っていた。

『ライ麦』に没頭するうちに，わたしは主人公のホールデン・コールフィールドとなっていた。ホールデンが傷つけば，わたしも傷つき，わたしが傷つけば，ホールデンの「まいったね」という言葉に癒された。サリンジャー

作品の「笑う男」という短編小説の中に，物語の中に登場する虚構のヒーロー，笑う男にあこがれて，自分こそがこのヒーローの正統なあとつぎだと子どもたちが夢見るシーンがある。ホールデンに心を奪われていたわたしも，まさにそうだった。虚構の世界に一喜一憂する物語の子どもたちの中に，いつしか，わたしも含まれていた。一八，九の多感な歳に，アメリカ文学の中でも，特に『ライ麦』に出会えたことは，幸か不幸か今の文学生活の礎となった。

文学の楽しみを覚えた2年目の秋，ゼミ選択の時期がやってきた。わたしは迷わずアメリカ文学のゼミを志望した。ゼミ面接では，志望動機や，文学のことを聞かれるのだが，好きな文学作品について問われた時，わたしは，『ライ麦』について話をした。わたしの後に面接を控えた友人が，長く待たされたことを愚痴っていたのは，ささやかな自慢だ。とにかく話が尽きなかったのだ。思う存分ホールデン愛を語った後，面接官である先生から『ライ麦』秘話について教えていただいた。自分が話した内容は（記憶とは都合の良いもので）おぼろげにしか覚えていないが，先生の言葉は鮮明に覚えている。後で怒られるかもしれないが，ここにその内容を書くことをお許し願いたい。先生曰く，『ライ麦畑でつかまえて』の邦題の中で，「キャッチャー」の「手」の意味と，「つかまえて欲しい」という願望が，邦題の最後の「て」に凝縮されているという。先生の言葉によって，わたしの中で衝撃が走った。ホールデンは，純真な子ども達を守る役割を担う，ライ麦畑の「つかまえ手」になりたいと願ったが，実は「つかまえて」欲しかったのは，ホールデン自身じゃなかったのだろうか，と。突然にして圧倒的な悲しみが，面接中のわたしを襲った。そして，これが，わたしにとっての『ライ麦』の答えとなった。

わたしは，現在も師匠と仰ぐ先生とこの面接で初めて出会って以来，文学の面白さを今日に至るまで教えていただいている。そして，迷いながらも根を深くはって文学とともに生きる人生の指標を教えていただいている。劣等生として路頭に迷っていたわたしは，しっかりと先生に「つかまえて」もら

ったのだ。

現在，わたしは関学英文に研究員として籍をおき，ハーマン・メルヴィルの研究をしているが，ホールデンの「まいったね」という言葉は，わたしの頭に常に響いている。文学に人生を与えてもらったという，ひとつの救いが，閉塞感に囚われていた奈良の田舎者の学生人生にあったのだ。わたしは，ひとりのホールデンであり，わたしにとってのキャッチャーは，わたしの先生であり，現在も（のらりくらりではあるが）文学生活を送っている関学英文である。

私が関学英文に身を置いてからちょうど十年が経った二〇一〇年，サリンジャーが逝去した。謹んでご冥福をお祈りする。劣等生の関学での学生生活がホールデンとともにあったと，最後に記しておきたい。

